

酒匂つよし  
短編集

春  
近  
く

酒匂つよし

もくじ



# 短編小説

ひげ	10
東脩	17
丘	24
田舎	43
ペンダント	52
傘	60
海千山千	67
ねんねこ	78
毬	85
お京という女	92
玉簪	108
女の鑑	115
莫迦にしゃがって	124
しゃんしゃん馬	137
赤い包み	155

春近く……………	161
朝明け……………	168

## 随筆

生まれ故郷……………	184
張り紙……………	186
ちびた鉛筆……………	188
二人の祖父……………	190
国敗れて……………	192
節目と伯父……………	197
乙女の祈り……………	200
豊潤の水……………	202
畦道……………	204
日々番に非ず「暇か？」……………	206
見て嗅いで……………	208
五羽の鶏たち……………	211

母親代わり……………	213
父の日記……………	216
下宿生活で……………	218
心は青春……………	220
車社会……………	222
壁新聞……………	226
三縄発電所への遠足……………	228
跡継ぎ……………	231
書斎……………	233
どんぐりところとろ……………	235
小学五年の運動会……………	236
語らぬままに……………	238
餅つき……………	241
国語の教科書……………	243
ファン気質……………	245
棚卸し……………	248
愛読者……………	250
忘れる……………	253

ゴルフ……………	255
父の説教……………	258
花見……………	260
オリンピックク……………	263
ふかし芋……………	265
多病息災……………	268
蟻通勘吾のこと……………	270

歌謡詞 (楽譜付)  
273

あとがき	277
初出誌等一覧	279

○スタッフ○  
編集 佐田 満  
構成 佐田 満  
校正 デザインオフィスはな  
装丁 Yuki  
帯コピー 宇田川森和

短編小説



## ひげ

坂上團六は、ものの見事な髭を蓄えている。頬から鼻下にかけて蓄えられたそのひげは、六十近くになった今も他人を威圧してやまない。

彼にしてみれば、重厚なひげというものは、ためらうことなく一身をなげうって、主君を死守する武士の誇りと気概を示す無比不可欠なものに外ならない。

その団六が、えらく憤慨している。それも今に始まったことではない。ズーっと以前からである。

大体、今の世情が気に入らない。藩の空気が意に添わぬ。

武士のくせして、やたら鬢付け油などを塗りたくり、まげも細く結って町人風に見せて意気がついている者の気が知れない。身形みなりだつて古武士ならいざ知らず、二十、三十の若造わかしもが継袴つぎかきで登城するとはもつての外というものである。

こんな手合ほど巧言を弄し、重職たちに取り入る。齒の浮くような世辞にくすぐられて、さっぱりたじり窘なめようともせぬ重職たちもだらしがない。

みんな泰平ボケだと思ふ。

大坂夏の陣も遠い昔の話となつた。あれから五十年余。藩主に率いられて大坂に馳せ参じ、

夏の陣を肌で知っている者も藩内では数人になつてしまつた。その数人もいずれも隠居の身であり、藩政には関係がない。

今の重職たちは、その頃に生まれた者か、そうでなくても、夏の陣の折は、出陣して行く父親を母親の腕の中で見送つた乳呑み児程度の幼さであつたはずである。およそ、戦場を駆け巡つた経験などあるうはずがない。

かくいう団六も、戦場の修羅をくぐつたことはない。五つの時に玄関先で父親を見送つた手合の一人である。

しかし、団六の場合は、夏の陣から帰つて来た父親の武骨さもあつてか、幼少から武辺に励み、「いぎ、鎌倉！」の折は、功名をたてるべく一心に劍の腕を磨いて来た。

もともと筋がよかつたのか、二十歳すぎには藩道場の目録をとり、三十半ばにして免許を与えられ、十年ほど前からは藩道場の最高位である教導を務めている。

そんな団六に事務方の役職の話がなくもなかつたが、団六は劍をもつて主に殉じるといふ武士の本道を極めるべく、他の役職には見向きもしなかつた。

父親が逝つてからの団六の剣へのこだわりは一層熾烈なものとなつた。教導の教練となると門弟たちは一様に後<sup>しり</sup>込み<sup>こ</sup>みした。その指南が余りにも強烈で手加減というものがないように思えたからである。

中には面体を打ち据えられて半月ばかり外出できない者もあつたほどである。さすがにこの時は、藩道場を支配する学校御用頭から注意があつたが、

「なに、骨には異常ござらぬよう打つてある。面体にそれと分かる青痣が残り恥ずかしいゆえ外出できぬだけのこと。恥を知らぬ今の若い者にはよき業でござろう」

と逆に嘯うそいた。

団六にしてみれば、今の軟弱な若者の気風に気づかないする御用頭の心の方がとんと分からな  
い。むしろ、藩の行く末、武士の在り方を問うなら、「よくぞやった」と賛辞のひとつも送つ  
てくるのが筋目だという気持ちがある。

「どやつもこやつも」と舌を打つ。団六のイライラは日増しに増幅して行くばかりである。

それがこともあろうに、先日、青天の霹靂ともいふべき藩の布令があつた。「ひげ禁止令」  
である。翌月以降、ひげを蓄えての出仕はまかりならぬとあつたのである。

この布令の関心は、偏に団六の身に集められた。

家中にひげを生やしている者は結構いたが、大半は隠居の身であり、出仕に差し障りのある  
者といえ、団六の外に十指前後を数えるまでであろう。その者たちも、ことさらに意趣をも  
つてひげ面ひげづらにしているわけではなく、禁止となれば素直に剃り落とすことは容易に察しられ  
た。ただ、家中の者は「坂上団六は違うぞ」と思っている。

ひげ禁止令の話題は、何年か前から江戸表で出ていた。日常の平穩な城勤めのどこに戦場の  
遺風ともいえるこげ威しのひげ面が必要であろうかと平和主義者は言い立てていた。

しかし、団六は、それは江戸でのことゆえと受け止めていた。礼式のために諸侯が集う江戸  
城では、それも時代の流れとしてやむを得ないものかもしれぬと思つていた。

だが、それより先にわが藩で「ひげ禁止令」が出されようとは夢想だにしていなかった。

父祖この方、ひげは武士の魂として重要視されて来たものではないか。争乱の世が続いて数百年、世情が治まったとはいえ、たかだかここ四、五十年のことではないか。

前轍を考える時、いつ動乱がぶり返して来ても何ら不思議ではない。束の間の泰平に酔つて武辺の気概を捨ててしまつてよいものか。その上、公儀の布令にやむなく追隨するならまだしも、その先を行く藩の禁止令の発布は、団六の憤怒をいやが上にも嵩じさせた。

家中の者が、団六のどう出るかに注目したのも無理はない。

——見てろ、団六が重職たちに怒髪天を衝く勢いで談じ込むぞ。

——重職たちがどう受けるか、見ものだぞ。

これまでも団六と重職たちの間はうまくない。藩道場の要職といつても、一介の教導にしか過ぎない団六は、重職たちと詰談判するような立場にはない。重職たちと面談したといえ、教導の補任状を受け取るため御用頭に同道してもらつたときくらいである。

それなのに、家中の者が双方の確執を口にするのは、団六が常に門弟たちに口を極めて重職たちの腰抜け加減を嘆いて見せているからである。もとよりその口振りは、重職たちにも疾うから聞こえている。団六が聞こえるようにいつているのだから、耳に達して当然である。重職たちは団六の放言を無視することによつて大人たいじんの名分を守つて来ていたが、本心穏やかならぬものがあつたらう。家中の者たちは、それらの意趣返しもあつて江戸より先に今回の禁止令が出されたものと踏んだのである。

しかし、団六は動かなかった。翌日からも普段と変わりなく藩道場の教導としての務めを淡々と果たした。

——なに、月が変わる頃には動くさ。

翌月までにはまだ十日余りある。その余裕が団六をじつとさせていると周囲は読んだのだが、団六はいよいよ明日から禁止令が実行されるという前日になつても動かなかった。

こうなると家中の関心は、団六が明日、自慢のひげをすつぱりと剃り落として道場に姿を見せるか否かにかかつて来た。

団六は布令が出たその晩、猛り狂った。理不尽に対する憤りは、床に入ってから也容易に収まらなかつた。どうやって談じ込んでやろうか、思案を巡らせた。しかし一介の藩道場の教導が正面から面謁を求めても、まずともに相手にはされまい。下城中の重職の誰かを待ち伏せして不意をついて談じ込むより仕方がない。

——しかし、それをしてどうなるか。

不躰の建言により禁止令が撤回されるとは到底、思われない。かといって、このまま黙って看過するのでは団六の腹の虫が治まらない。叶わぬまでも楔のひとつは打ったという証しを残しておきたい。

その時、ふつと禁止令が出た直後の、家中の面々の表情を思い出した。彼らの眼は、「このお布令はお前のために出されたのだぞ、さあ、どうする？」といていた。そして、明らかに

団六が重職たちに反旗を翻して振じ込むのを期待する眼でもあつた。

——そうはいかんぞ。

団六は思つた。

口にして実りのない言動なら、それよりも家中の者たちの期待をあつきりと肩透かしにしてやろうと思ひ至つたのである。それもある一思案を胸中深くしのばせて……。

——見ているがいい。

団六がほくそ笑みつつ眠りについたのは、それからほどなくのことである。

当日、団六は綺麗さっぱりひげを落として出仕した。ひげを失つた貌はいかにもものつべりとしていて、いつもの団六とは似ても似つかぬ趣を漂わせていたが、表情はにこやかでいつものとおり教導としての務めを果たし、何かあるぞと期待していた門弟をはじめ、この様子を伝え聞いた家中の者たちをがっかりさせた。その門弟たちが口あんぐり啞然とさせられたのは、一日の稽古も終わり、いつものように場外の大洗い場で下帯一つになって汗を流していた時である。

珍しく門弟たちに交じつて汗を流していた団六が、不意にその下帯までとつた。その行為自体が異常なものであつたが、門弟たちはその視線を団六の股間にやつて眼を剝いた。あるべき黒々としたものがこれまた綺麗さっぱり剃り落とされ、男の象徴の周囲には青々とした剃り跡しかなかったからである。

団六が、声高に、しかし決して上ずっていない、ごく当たり前の口調でいった。

「わしは、武士もののふのひげというものは相手を威圧し、おのれを鼓舞するため戦場においては欠かされざるものと思つて来た。その戦も途絶え、ひげも無用の長物といわれれば剃らざるを得ない。ただし——」と、そこで一息入れると、眼の隅に悪戯っぽい笑みを浮かび上がらせた。

「戦といえは顔のひげだけでは不公平しも。下の黒々もいざ合戦となれば戦場いくさばに向いておる。ところが拙それし、歳のせいか、最近そちらの方はとんとご無沙汰。よつて戦場に赴かぬ下のひげも無用の長物と断じ、かくの如くは剃り落として参つた次第」

周囲の者は団六の口上を聞いて暫くポカンとしていたが、やがてその放心は徐々に大きな拍手へと変わつて行つた。

このことを配下の者から伝え聞いた重職たちは「馬鹿な奴めが……」と破顔し合つたが、団六がいつ言い立てて来るのか身構えていただけに、ものの見事に外されたことを覺きつて、鼻白むばかりだった。

「やられましたな」

重職たちの笑顔は、今度は苦笑いとなつた。

家中の者は、この勝負まさに団六の勝ちと言ひそやした。

ただし、団六が下の戦場に、その後一切、出向くことがなかつたかどうかは、残念ながら詳らかでない。

## 束脩そくしゅう

新吉が国境近くの山里まで櫛材の注文に行つて二日ぶりに戻つてみると、母親のおなみの姿が家から消えていた。何でも新吉が出かけて行つた日の翌日、つまり昨日の朝からいなくなつて、一晩過ぎた今日の午になつても戻つて来ないのだという。

この話も通いの職人の一人がそつと耳打ちしてくれたことで、父親の辰造は戻つて来た新吉の方をチラと見ただけで、何もいつてはくれなかつた。普段どおりの表情で細工場に座りこみ、黙々と櫛の齒挽きに精を出しているばかりなのである。

「おつかさんがいなくなつたつて？」

喉の渴きを癒やそうと茶の間に入った新吉が障子ごしに訊ねてみても、辰造は返事もしない。女房が無断でいなくなつて、さぞや臍を曲げているのだろう。

「姉さんのところへ訊いてみたかい」

再び声をかけたが、やつぱり辰造の返事はなかつた。姉のところへは確かめもしないらしい。

女房の外歩きを極端に嫌う辰造だったから、母親のおなみに親しい友だちがあつたとも思われない。それに幼い時からみなし兎同然だったというおなみに頼るべき係累のあろうはずもな



い。だとすれば、一夜の宿を求める先は姉の嫁ぎ先しかないのだ。

姉のおては去年の春、二里余り離れた漁師町の乾物問屋に嫁ぎ、商売繁盛で忙しい日々を送っていると聞いている。その二里余りの道のりを思うと、国境近くから帰って来たばかりの新吉にとつては気の重い遠さだったが、辰造にその気がない以上、ここは自分が行くしかない。茶の間を出ようとして、ふと新吉の目が茶筍筒の上に止まった。

一枚の紙片が無造作に置かれている。それはどうやら受取書のものであったが「またおやじの奴、いい加減に取り扱いやがつて」と思いながら特に気にとめることもなく、とりあえず茶筍筒の中にしまいこんだ。櫛作りでは厳格な辰造だったが、それ以外のところでは、こうした杜撰ずさんさを見せることが、ままあつたのである。

新吉は細工場の前を通り過ぎ、上がり框で草鞋の紐を結び直すと、辰造へは背を向けたまま家を出た。やれやれ、という気がした。

父親の辰造は同業仲間でも評判の無口で仕事熱心な男で通っていたが、それだけに一度いい出したらもう聞く耳を持たぬという頑固さも併せ持っていた。

そんな辰造におなみは常に従順に仕え、たとえ辰造が横車を押すようなことがあっても愚痴ひとつこぼさず従っていた。その姿に新吉も子供心ながらに感服していたものだったが、それがいつの頃からか、何ごとにも辰造のいうとおりにしか動かないおなみの従順さに臍甲斐なさを感じるようになり、徐々に母親を軽んじる気持ちに変わつて来ていた。

先月末もこんなことがあつた。

新吉が夜更けにまで明かりを灯して帳付けをしていると、襖をあけておなみが入ってきた。茶と干菓子を脇に置きながら「大変だねえ」と新吉の手元をのぞきこむ。先月は俄の注文の差し替えなどがあつて整理にやや手間どつていたのである。

「あたしに少しでも手伝いができればいいんだけどねえ」

と、おなみは情けなさそうに溜息まじりにいつた。

幼い頃からみなし児同然に育つたおなみには手習所に通つたこともなく、読み書き算盤、どれひとつとしてできるものなぞないのだ。

「どうかしら」と急におなみが新吉に顔を寄せていつた。

「ご近所に最近、年寄りにでも教えてくれるつていう手習所ができたようなんだけど、あたしも通つてみるというのはどうだろうかねえ」

おなみとしてはそこで手習いや算盤を学び、少しでも帳づけの役に立ちたいということだったのだろうが、目の前の帳簿整理に頭がいっぱいになっていた新吉は、邪険にもおなみを早々に部屋の外へと追い出してしまったのだつた――。

疲れている足を励まして姉の嫁ぎ先へと歩を運びながら、そういえばこのところ母親のおなみとはまともに話したこともなかったな、と新吉は改めて思った。おなみから話しかけられてもなぜかしら腹立たしい気分が先立ち、身を入れてじつくりと耳を傾けてやる気にはなれなかったのだ。おなみはそういう煩わしく思う新吉の心の動きを敏感に察知していたのに違いな

い。

それでも、妹のおみつが家にいたこの半年前までは、まだよかつたのかもしれない。

十四歳になつたおみつは半年前から隣町の大商家へ行儀見習いをおかねて女中奉公に上がつていた。年端がいかないとはいへ女同士、姉のおてるが縁づいて家を出てからはおなみにとつておみつが心許す唯一の話し相手だつたはずである。

おみつもいなくなつて穴の空いたようなおなみの心に、辰造と新吉父子のすげない態度は、余計、ひとりだけ蚊帳の外に置かれていような淋しさを覚えさせていたのではあるまいか。

考えてみれば、辰造の始めたお六屋（櫛屋）が何人かの通いの職人を置けるまで、いつぱしの細工場になつて来られたのも、頑固者の夫にひたすら仕えて来たおなみの内助の支えがあつたからこそそのことではなかつたのか。

——もつとそのことに感謝すべきだつた。

だが実際はそんな気持ちは露とも持ち合わせなかつた。新吉だけではない。辰造にいたつては、感謝しないどころか、今も、何ゆえおなみが黙つて家を空けてしまつたのか、そこにすら思いを巡らせようとせず、無断でいなくなつたおなみにただただ腹を立て、つむじを曲げているだけのようなのだ。

町境を流れて下る、城下でいちばん大きな川の河畔に出た時、新吉の目に、橋向こうからやつて来る姉のおてるの姿が映つた。おてるの方も気づいたらしく、何か口にしながら小走りに近づいて来る。

「おつかさんは——」

と、新吉も走り寄りながら急ぎこむように訊いた。

「おつかさんはじゃないもんだよ。あんなおつかさんを見たのは初めてだよ」

とおてるは半分、怒つたようにいつた。だがそのことばでおなみが姉の嫁ぎ先にいるということとは分かった。

新吉は橋の袂の茶店におてるを誘つて奥の床几に腰かけた。「忙しくてね、出て来るのがこんなに遅くなつてしまつて」と断りをいいながらおてるの話してくれたところによるとこうだつた。

昨日の昼過ぎ、おなみはおてるのところへひよつこり姿を見せたという。それも何げないふうで、商いの合間に相手をするおてるに「いいねえ、ここは。潮風の匂いなぞがして」などとのんびり話すものだから、ちよつとした息抜きにでもやつて来たのだろうと軽く思つていたそうだ。

ところが日が西に傾いても一向に腰を上げようとする気配がないので心配になり、「家の方は大丈夫なの？」と水を向けてみても「帰る」とはいい出さない。それどころか「今夜はここに泊めてもらえないかね」と、来た時とは様変わりした暗い表情になつていつのだった。

「えつ」と驚いたおてるがもしやと思つて訊いてみると、「家には黙つて出て来た」と目を伏せる。

日頃、あれほど大人しいおつかさんがそこまでするのはよつぽどの事情があるのだろうか

と、そのわけをおてるが何度も聞き出そうとするのだが、おなみはことばを濁して話そうとしない。

そうこうしているうちに日も暮れてしまい、女の夜歩きもならず、店の者を実家へ使いにやるのも嫁の身として気が引けたのでその夜は泊まってもらうことにし、久しぶりに枕を並べて寝<sup>やす</sup>んでいると、やつとおなみがそのわけを話し始めたのだという。

どうやらおなみは、新吉が櫛材の仕入れに出かけた日の夜、辰造に「手習所に通わせてほしい」と願つたらしい。おなみが夫にそういう類いのことを口にするのは、これまでにはまずなかつたであろうから、おなみにはおなみなりの相当の腹がまえがあつたということなのだろ<sup>う</sup>。

いつか新吉にも話していたように、手習所に通つて読み書き算盤を身につけ、少しからでも帳づけの役に立ちたいという一途な思いからだつたに違いない。

ところがその思いは辰造の一言のもとにはねつけられてしまった。

「余分なことは考えなくていい。お前は台所仕事さえしていりゃあいいんだ」

この時、おなみの心の中に何かが起こつたのだ。それまで心の片隅に押しやって決して外へは出さなかつた何かが、抑え難いものとなつて蠢<sup>うごめ</sup>きだし、その結果が無断で家を飛び出すとい<sup>う</sup>、誰しもが驚くような行動をとらせてしまったものらしい。

おつかさんにもそんな一面があつたのか。

新吉はむしろおなみを見直すような気さえして来た。

その時、ふと新吉の脳裏に蘇つて来るものがあつた。それは出かけに新吉が茶筆筒の中にしまいこんだあの紙片だつた。

あれはてつきり商売上の受取書一枚だと思つたのだが、あの中には「束脩」という文字が確かに書かれてあつた。今にして思えばあれは手習所が出した受取書であつたのだ。きつと辰造が今朝早く密かに手習所に向いて束脩（入学金）を納めて来たのに違ひない。

女房がいなくなつても表情ひとつ変えないように見えた辰造だったが、その実、昨夜はおなみが家出をした理由を自分なりに一所懸命、考へてみたのであろう。そしてまた辰造には、今更改めて確かめるまでもなくおなみは姉の所へ行つてゐるはずだという、揺るぎない確信があつたということでもあろう。

——おやじめ。

新吉の胸におかしさがこみあげて来た。それはほのぼのとしたおかしみでもあつた。

「今朝も帰るつていわないんだよ」

運ばれて来た湯茶には口をつけようともしないおてるに、

「なあに、心配することはないつて」

屈託のとれた新吉の声は明るかつた。

註・束脩とは、入学・入門の際に弟子・生徒が師匠に対して納めた金銭や飲食物のこと。